

Title	岡千仞“燕京”への旅：『燕京日記』を中心に
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 2008, 17, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77843">https://hdl.handle.net/11094/77843</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 岡千仞“燕京”への旅—『燕京日記』を中心に\*

福井 智子\*\*

キーワード：岡千仞 観光紀游 燕京

日本汉学家冈千仞（1833-1914），字天爵，又字振衣，号鹿门，出生于仙台藩的下级武士之家，青年时期曾在藩校养贤堂、江户的昌平坂学问所学习汉学，并精于洋学。明治维新以后，曾就职于修史馆、东京图书馆。因在旧萨摩、长洲藩等势力强大的新政府难于得志，四十八岁辞职。之后，主要开办家塾培养后人、著述及作诗。

明治十七（1884）年五月末，酷爱游历的冈千仞自横滨抵达上海，对中国进行了为期大约十一个多月的考察。他以上海为中心，考察了苏州、杭州、天津、北京、广东、香港等地。途中不仅游览了中国各地的风光，考察了社会风俗民情，还拜访了许多清朝的官吏及著名学者，并指出了当时中国社会存在的“烟毒”、“六经”等时弊。归国后，他于明治二十五（1892）年撰写出版了汉文的考察游记《观光纪游》，共十卷。冈千仞的《观光纪游》与竹添井井的《栈云峡雨日记》被称为明治初期的游记双璧。

本文以《观光纪游》中冈千仞对烟台、天津、北京、保定，即所谓的“燕京”考察时所记录的《燕京日记》为主要资料。因当时的“燕京”与清朝的政治关联度较高，而且冈千仞游历考察“燕京”时，正值中法关系紧张，因此冈千仞与李鸿章、盛宣怀、李慈铭及翰林院的学士、总理衙门的官吏、莲池书院的书院生等清末人士，就中法战争等时政问题展开了讨论，讨论进行得很激烈。冈千仞认为应将中法的对立当作“不特御外侮，又可以除内忧”的契机。他特别呼吁中国社会应借此会“变祸为福，转危为安”，大力进行改革。冈千仞认为，科举是中国内忧的重要因素之一，他还对当时的“燕京”人士特别指出了科举的弊端。

本文通过《燕京日记》中冈千仞与清末的“燕京”人士之间的争论，考察清末“燕京”人士是如何把握中国的现状及对日本的见解，进而分析“燕京”人士的时政观点对冈千仞的中国观所产生的影响。《观光纪游》对森鸥外、依田学海、森田思轩等日本明治文坛的著名文学家了解中国也颇具影响。本文力图通过对《观光纪游》的考察，发掘并昭示其作为史料的研究价值。

---

\* 冈千仞の“燕京”游历一以《燕京日记》为资料（福井智子 FUKUI Tomoko）

\*\* 大阪大学非常勤講師

## 1. はじめに

岡千仞（1833 - 1914）は字を振衣、号を鹿門といい、幕末の仙台藩に生まれた。藩校の養賢堂、そして昌平黌で学んだ千仞は漢学、洋学共に精通した人物であった。幕末期に尊皇攘夷を主張した為、藩主によって投獄された経験も持つ。明治維新以後は修史館編集官、東京府書籍館幹事等を歴任、しかし薩長出身者が多くを占める新政府内で志をとげる事は難しく、早くに官を辞す。その後は私塾<sup>すいゆうどう</sup>綏猷堂を開き、原敬、片山潜、尾崎紅葉をはじめとする多くの後進を育て、且つ執筆に従事した<sup>1)</sup>。

明治17年（1884）5月末、千仞は横浜から汽船東京丸に乗り、上海へと向かった。それは凡そ一年にわたる中国旅行の始まりであった。上海に到着した千仞は、そこを起点に蘇州、杭州、天津、北京、広州、香港へと足を伸ばし、名所旧跡を訪ねると同時に、各地の人士と詩作、及び筆談による議論を通じて交流した。帰国は翌年の四月であった。後にこの旅の記録をまとめて発表したものが、『観光紀游』十卷<sup>2)</sup>である。竹添井井の『<sup>さんうんきやううにつき</sup>棧雲峽雨日記』と共に、本書は明治初期の代表的な中国旅行記の一つに数えられている。

さて本稿が対象とする『燕京日記』（上、下）は、『観光紀游』の五、六巻に当たる。書名の“燕京”は、北京以外に訪問先<sup>たてま</sup>の芝罘、天津、保定を含む。『観光紀游』中の他の日記に比べ、首都、直隸省への旅であった為に、李鴻章をはじめとする清朝の官僚、<sup>ちやうゆうしやう りじめい</sup>張裕釗、李慈銘といった学者、日本人では榎本武揚、原敬、東次郎らなど、政治家、学者に数多く出会い、また議論も列強のアジア進出、日中関係といった緊張感を伴う内容となった。あまりにも率直な千仞の意見はしばしば相手を不快にさせ、時には本気で怒らせもした。しかし短期間に、民間人としてこれほど多くの両国関係に関わる人士らとなしたその議論は、当時の日中人物交流における傑出した一例だったと言える。

本稿ではまず岡千仞が旅先で行った議論を通じ、清末“燕京”の中国人士たちの、自国の現状に対する認識、及び日本理解を確認する。千仞の旅した時期と当時の中国の置かれた国際的位置を考慮した上で、その一傾向を明らかにしたい。そしてこれらの分析を通じ、“燕京”への旅が千仞の中国認識に与えた影響を考察する。

『観光紀游』、及びそこに収録された議論を紹介する先行研究はいくつか存在する。しかし各議論の内容、そしてそこから見出される日中知識人の認識の相違等に深く踏み込んだ研究となると、今のところほとんどない。森鷗外、森田思軒、依田学海とい

<sup>1)</sup> 岡千仞の経歴については、主として宇野量介『鹿門岡千仞の生涯』、（発行者・岡広 1975）、町田三郎『明治初年の中国旅行記（その2）—岡鹿門『観光紀游』—』、『明治の漢学者たち』、（研文出版 1998）、王曉秋『岡千仞と『観光紀游』—近代日本人の訪中旅行記』、『日中文化交流史話』、（日本エディタースクール出版部 2000）を参照する。

<sup>2)</sup> 引用は『観光紀游』、（沈雲龍主編『近代中国資料叢刊』）により、漢文訓読は筆者による。

った明治の文壇を代表する人物らの中国理解にも一定の影響を持った『観光紀游』について<sup>3)</sup>、本稿をその資料的価値をより広く伝える為の一助としたいと思う。

## 2. 『燕京日記』の背景

最初に『燕京日記』に綴られた旅の行程、及び出会った主要人物について確認する。まず明治17年(1884)9月27日、千仞は上海から汽船武昌号に乗り、29日に芝罘(煙台)に到着する。アロー戦争後に開港された芝罘は、欧米各国の領事館が置かれた国際港であった。千仞はここで“支那通”としても知られる東次郎領事をはじめとする日本領事館のメンバー、そして芝罘道台(地方長官)の方汝翼らと出会う。それから10月4日に重慶号で芝罘を出発し、天津へと向う。途中、列強の侵略に備えて増築、修理される大沽砲台を見る。天津には6日に到着し、13日<sup>4)</sup>まで滞在した。当時の天津の日本領事は原敬であった。「首都の咽元」「京城の門戸」と称された天津で、千仞は清末の大官李鴻章、盛宣懷道台、李の下でアジア外務を担当する朱舜江らと出会い、意見を交わす機会を得た。朱舜江であるが、以前訪れた余姚の朱氏の一族で、朱舜水の末裔にあたる。その後馬車で北京に向うが、途中の道は凹凸が激しく、極めて悪かった。北京の旧南玄関である永定門をくぐった先も「陥入して墜状」(10月14日)といった具合で、激しく揺られながら14日の晩に公使館に到着する。北京での千仞は、榎本武揚公使をはじめ、同文館のメンバーで「万国公法」の漢訳で知られるウィリアム・マーティン(丁韞良)、徐琪、沈曾植、朱一新、蔡世佐ら翰林院の学士、詩人で学者の李慈銘、そして馮申芷、袁昶、鄧承修ら外務担当の官僚らと交流し、議論を戦わせた。途中21日から26日までは北京城外へ出、円明園、西山の諸寺、万里の長城、明陵などの名所旧跡を巡り、歴史に思いを馳せる。「燕薊覽古廿律」<sup>5)</sup>はこの時の観光に多く題材を採る。また城内では国子監、孔子廟、瑠璃廠、景山、そして北海、南海、中海などを見学した。ところで北京は街中も道の整備が悪かった。雨が降ると湖沼の如く水浸しとなり、ぼつとかすむ大通り、傾いた屋敷などのその光景に、「輦轂の下(首都)は、万方の矜式(見習う)する所なり、而して今は斯の如し。地方の道路、燕没して修められず。亦た其れも宜なる也」(10月31日)と言わざるを得なかった。11月11日、北京を後にした千仞は、盧溝橋を経由し、14日に保定に至る。保定は天津、北京とそれぞれ線で結ぶと、ほぼ正三角形を描く位置にある。保定には蓮池書院があり、当時は清末桐城派

<sup>3)</sup> 森鷗外が明治29年(1896)に創刊した文芸雑誌『めざまし草』巻之二十に、「標新領異録」という企画がある。その中の「水滸伝」の批評に、森田思軒が出典は明らかにしていないものの、『燕京日記』の記事(10月3日)を引用している。また明治19年12月2日の『学海日録』の記事に、『観光紀游』を読んだ詳細な感想が記されている。

<sup>4)</sup> 原敬の「天津日記」では、「岡千仞岡濯陸路北京に赴く」は12日の日付となっている。

<sup>5)</sup> 漢詩集『観光游草』所収。

古文の代表的作家で、書法では碑学派の大成者である張裕釗が主講を勤めていた。千仞は横浜を出発する時、張裕釗の息子で清国公使館の随員であった張沆から、蓮池書院を訪ねて父親に会うことを勧められていた（5月29日）<sup>6)</sup>。この訪問で千仞は、蓮池書院を初めて訪れた日本人となる。そして18日までの短い滞在期間中、張裕釗の深い学識に触れ、且つ書院のメンバーらと学問、時事問題など激しい議論を繰り広げるのであった<sup>7)</sup>。20日に千仞は再び天津に立ち寄り、27日まで留まった。李鴻章、盛宣懷、盛から天津道台を引き継いだ周馥<sup>しゅうふく</sup>、そして原領事らと面会し、また熱心に自論を展開した。それから豊順号に乗船して天津を去り、12月2日に上海へと戻った。

さて千仞が旅した清末の中国は、まさに内憂外患に喘いでいた。列強の進出、政情不安、汚職や不正の横行など、国内外の諸問題が中国社会を各方面から揺るがした。とりわけ千仞が“燕京”を旅した時は、ヴェトナムを巡る清仏の抗争が激化した時期と重なっていた。

清仏戦争は、ヴェトナムの清朝との朝貢関係を完全に断ち切り、自国の独占的な保護国としようとしたフランスと、宗主国としてあくまでも朝貢関係にこだわった清朝との争いであった。両国間では度々交渉がもたれ、条約の締結を通じての関係正常化も模索された。しかし結局は妥協点が見つからず、1884年8月、フランス海軍が台湾の基隆を攻撃し、洋務運動の一貫として組織された福建艦隊を全滅させ、また福州船政局、および馬尾砲台を破壊したことで、両国は全面戦争へと突入したのであった<sup>8)</sup>。千仞の旅はこの清仏戦争に大きく影響された。例えばフランスの基隆攻撃により、上海の日本公使館から安全確保の為に上海へ戻ることを要請され、千仞は福州へ向うことを断念せざるを得なかった（8月13日）。当然、千仞と中国人士たちとの議論において、清仏戦争が重要な話題となったことは以下に見る通りである。また李鴻章との面会時に曲阜の孔子廟を訪ねたかと聞かれ、千仞は「内地は人心<sup>きんしん</sup>洶洶」（さわぎどよめく）として、外人が旅行するに便ならず」（11月26日）と答えた。千仞はもともと曲阜に行く為に、天津で再び李と面会することを断っていた。ここでは旅の行程の変更を理由に、清仏戦争への不安感の広がりを李に訴えかけたのであった。

中国はまた日本との間に琉球問題を抱えていた。幕末以来、琉球の日中「両属」は両国の懸案事項であった。それが1879年、明治政府が琉球の廃藩置県を断行して沖縄県

<sup>6)</sup> 本稿では、「燕京日記」以外の『観光紀游』所収の他の日記も適宜引用する。

<sup>7)</sup> 張裕釗、及び蓮池書院と岡千仞の関係については、杉村邦彦・寺尾敏江編「資料紹介 宮島詠士清国留学書簡（1）」、『京都教育大学紀要』No.91（1997）、魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』（研文出版2002）、pp.231 - 264を参照する。

<sup>8)</sup> 茂木俊夫「ヴェトナムをめぐるフランスとの戦争」、『変容する近代東アジアの国際秩序』（山川出版社 1997）pp.54 - 58、田中正俊「清仏戦争と日本人の中国観」、『田中正俊歴史論集』（汲古書院2004）pp.412 - 423参照。

を設置し、琉球の日本への強引な帰属を推し進めた「琉球処分」によって激化した。この日本による琉球併合は中国社会を大きく刺激し、多くの中国知識人たちの反発を招いた<sup>9)</sup>。千俣が親しく交わった中国人士たちも、琉球問題には厳しい態度をとった。上海の新興知識人の一人である張煥綸<sup>ちやうかんりん</sup>が、姚文枬<sup>ようぶんぜん</sup>の著作である『琉球志』の序文の中で、日本が琉球に梃を置いたことは「無名」であると抗議するのを千俣は眼にしている（8月21日）。また清仏の対立をめぐるフランス側と交渉に臨んでいた李鴻章も、明らかに琉球問題を意識した上でその交渉を進めていた<sup>10)</sup>。

このような旅の背景のもと、千俣は以下に見るように、時には明治維新を成し遂げて“近代国家”への道を邁進する日本国民の立場で、また時には政府組織と何ら関係を持たない一介の民間人として、中国人士らと議論を通じて交流したのであった。

### 3. 岡千俣と清末“燕京”の中国人士たちとの議論— その一 時事問題について

清末“燕京”の中国人士の現状認識、及び日本理解を知る為に、『燕京日記』中に見られる千俣との議論に注目する。本稿では以下二章に亘り、主要テーマとなった時事問題と日本事情を順に取り上げる。議論の頻度が圧倒的に前者へ傾いたことは、次の通りである。

上述したように、清仏の対立はまさにこの時、激化の様相を呈していた。そこでまず芝罘で面会した方道台に対し、千俣は「法虜（フランス軍）の猖獗する（荒れ狂う）を、小人は中人の為に寒心す。知らず此の事の何れか帰着する所ぞ」と、打開策を含むその意見を求めた。ところが方道台は沈黙の後、公務を理由に帰ってしまう。この方道台の対応に、千俣はまさか外国人と時事を論じて国体を傷つけることを嫌うはずもなからう、「要は事体を解さざる者なり」と判断する（10月2日）。これまでも国際事情について「茫たること霧中の如し」（9月12日）といった人物に数多く出会い、千俣はいささか慣れていた。しかし政治性の強い“燕京”の地では、方道台のような人物は稀で、むしろ熱心に意見を求める人士が多かった。とりわけ天津道台の盛宣懷は『燕京日記』中で最も千俣と熱心に議論した人物の一人で、千俣に清仏戦争に関する見解を求めてきた。「法虜の辺を猶<sup>みだ</sup>し、国事日に急なり。日東（日本）は中土と唇齒<sup>しんし</sup>たり。先生策有らば、請う教えられよ」（10月9日）。更に盛は、日本の協力を得てフランスを撃退することを考えていた。「法虜の状無きは、神人の怒る所なり。若し貴国が中土に協力せば、之を一撃の下に勦絶<sup>そうぜつ</sup>するも、難しと為さず」（10月10日）。近代国家の外務省に当たる総

<sup>9)</sup> 琉球問題については前掲、茂木、pp.65 - 71 を参照する。

<sup>10)</sup> 西里喜行「清末中琉日関係史の研究」、(京都大学出版会 2005)、pp.443 - 444 参照。

理衙門に官する鄧承修が「若し貴国の唇齒の義を重んじ、力を中国に戮<sup>あわ</sup>さば、則ち彼は四に大敵を受けて兇鋒挫<sup>きようほうくじ</sup>くべき也」(10月17日)と、同様の意見を持っていたことから、フランス撃退に日本の協力を求める主張が、少なからぬ中国人士たちの間で共有されていた様子が窺われる。こういった好戦的な意見に対し、千仞は維新前の日本の状況を重ねて「廿年前に尊攘の義を論ぜし時の見<sup>けん</sup>」(10月10日)、「廿年前に見る所」(10月17日)とし、時代錯誤であると斥けた。まず日本は小さな島国であり、軍事的にも経済的にも優勢な欧米諸国との間に安定した関係を維持する為、常にその不興を買うことを恐れていた。「豈に故無く力を中土に協<sup>あわ</sup>せ、怨みを法国に結ぶべきや」と、対外関係上不可能だと述べる。むしろそんな事よりも対外的危機に直面している今こそ、中国は国内の諸問題を解決し、新たな体制を築くべきだというのが千仞の主張であった。幕末の衰退、混乱から明治維新を成し遂げた日本が、まずその一例であった。しかし盛はこれまで「科挙無用の学」に没頭し、また電線の敷設事業に携わるなど、「外事」海外の大勢について研究する暇も無かった為、今後中国社会の進むべき方向がわからないと述べる。そこで千仞は「今日よりして上は諾<sup>ア</sup>垂の洪水以前の世界なり。今日よりして下は、諾<sup>ア</sup>垂の洪水以後の世界なり。今日の謀を為すに、宜しく眼を此に着し、禍を變じて福と為し、危を転じて安と為す所以を策すべし」と言うと、盛はようやくいくらか千仞の話に納得を示した。そして会見の後、千仞は盛に上述した張煥綸との間で語った自らの清仏戦争打開策—李鴻章が醇、恭二親王を奉じて欧米へ行き、友好関係を示してこの戦争におけるフランスの非を議論で訴え、且つ同時に欧米の繁栄振りを視察して自国の近代化を促す一等の提言をまとめた文書を手渡すのであった(以上10月10日)。主戦論に固執する鄧に対して「(清仏の対立など)今日の事は、特<sup>た</sup>だ外侮を禦<sup>かぎ</sup>ぐのみならず、又た以て内憂を除くべし」(10月17日)と述べるように、千仞にとって清仏戦争は、単なる「外患」を防ぐのみならず、「内憂」を除くきっかけであった。

清仏戦争について議論する際、千仞が常に感じたものは中国人士の時事、外国事情に対する知識の乏しさであった。それは上述したような自国の軍事力、国際的立場を顧みない主戦論をはじめ、きわめて優秀な人材を集めた翰林院の学士である徐琪が、外務担当で無いことを理由に清仏の対立打開に消極的であること(10月18日)、一方同じく翰林院に務める蔡世佐の、欧米の海軍技術さえ学び取れば、それでもって欧米に報復できるとする、皮相で且つ「師に反噬<sup>はんせい</sup>する」恩を仇で返すような態度(11月4日)等に見られた。そしてこれらの原因として千仞が考えたものが、専ら経書の暗記を求め、技巧的側面を極度に重視する文体の知識等を問う官吏登用試験、科挙であった。「煙毒(アヘン)と六経の毒(科挙の弊害)とを一掃し、中土の元気を振るい起こす」(8月25日)を終始主張した千仞にとって、科挙こそアヘンと共に、中国の抱える「内憂」

の一大要因であった。“燕京”の旅では、さすがにアヘン館やアヘン喫煙者は目に付かなかつたが、科挙の弊害は頻繁に感じられた。そして保定での蓮池書院の書院生との議論は、まさに清仏戦争を発端にした激しい科挙批判となった。

保定を去る前日の晩、張裕釗の息子である張澹<sup>ちやうかん</sup>をはじめ十数名の書院生が千仞のもとを訪れた。千仞は書院生らに対し、「凡そ人士は読書学問し、將に当世に為すこと有らんとする也。今や法虜<sup>しやうけつ</sup>猖獗し、福州に一敗し、台湾は僅かに保つ。中土の危急は、日一日に甚だし。諸君何をか策し、以て目下の急を済<sup>すく</sup>わん」と、知識人としての清仏戦争への対応を尋ねた。すると一人の書院生が、「法虜は無状なり。中土大挙して征討せば、之を一撃の下に剿絶し、片甲隻輪<sup>へんこうせきりん</sup>（軍艦）をして西還せしめず。必ずしも先生の憂悶するを須<sup>もち</sup>いず」と、自国の軍事力に全く通じない強硬論でもって答えた。これを千仞は、科挙試験で拔群の成績を修めた為、軍事知識に乏しいにも拘らず馬尾の防衛を担当した張佩綸<sup>ちやうはいりん</sup>が、一たびフランス軍の攻撃に遭うや為すすべも無く撤退した事例と何等変わらないとし、「兵豈に口舌筆冊の謂いならんや。僕の聞くを願う所に非ざる也」と厳しく批判した。その後千仞は、科挙の為の学問に今日の危機的状況を救う術が無いこと、それらに注ぐ余力で翻訳書を読み、欧米諸国の繁栄ぶりを研究することこそ、中国社会の長年にわたる陋習<sup>ろうじゆう</sup>迂見<sup>うけん</sup>を一変する、「有用の學術」であると説いた。千仞の「科挙を指斥し、天下を誤つるの本<sup>もと</sup>」となす意見にこの場は騒然とし、結局要領を得ずして散会する（以上11月17日）。

科挙については中国人士の中でもその弊害を認め、公然と非難する者は多数いた。先に挙げた盛道台をはじめ、総理衙門の役人の馮申芷は、「時文、詩帖（共に科挙試験の意）は、唯だ浮華の趨なり。是れを以て天下を率い、復た実学を講ずる者無し」（10月30日）と言ひ、同じく北京で出会った駱鈞<sup>らくきん</sup>なる人物も「人才日に降り、風俗日に儉<sup>かりそめ</sup>なるは、皆科挙の学の之を為す也」（11月8日）と、科挙の害を指摘した。保定にも千仞の科挙批判に共感を示した人物がいて、翌日千仞を尋ねている。それは書院生の齊令辰<sup>せいれいしん</sup>である。書院は宋以後に作られた公私の学校で、本来は科挙とは別にその卒業生を官吏として採用することが念頭に置かれていた。しかし当時の書院は、科挙の予備校的存在にすぎなかった<sup>11)</sup>。齊は天文や数学に興味を持っていたものの他の書院生には全く理解されず、科挙の学<sup>がく</sup>に追われて結局は究めることが出来なかつたこと、主講を勤める張裕釗先生だけは翻訳書を院生が読むことを拒まなかつた等、出発前の千仞に打ち明けた。これに対して千仞は、欧米の学校制度を紹介した上で、事物の理を究めて知識を深める「格致誠正」の科学的な学問姿勢を説き、欧米の学問を学ぶ必要性を語るのであった

<sup>11)</sup> 宮崎一定『科挙』（中央公論社 1963）、pp.189-190、前掲、魚住、pp.257-258 参照。



(11月18日)。

科挙を厳しく批判した千仞であるが、ただ弊害有るのみとは考えていなかった。張裕釗や李慈銘ら著名な学者の学才はもちろんのこと、翰林院に官する徐琪、朱一新、蔡世佐らの詩作する姿には「腹中万卷、筆に任して直書する」、「要は才無き者の為す所に非ざる也」(11月4日)と甚だ感服している。科挙試験に励む仲間の中、一人欧学への関心を持った斉を励まし、更なる研鑽を勧めたが、それは「三代(夏、殷、周の中国古代王朝)の聖人の学は、中土に亡び、欧米に存す」と塩谷宕陰しおのやとういんの言を引き、中国の学問の価値、及びそれが欧米のそれと通じることを認めた上で、「百事なげうを擲ち、訓話帖括くんこじょうかつに従事する」科挙への拘泥こそが問題であるとの意であった(以上11月18日)。

天津の原領事の宴席では、後の第三代駐日清国公使、徐承祖じょしょうそと出会う。その時徐が欧米の学問を学ぶことで中国の学問「六経」の説が往々にしてそれらと符合することに気付く、そこから「唯だ学者の変通(物事に応じて変化して、何事もうまくいくこと)して以て時用にかな適うを知らざるに病む」と、学問の成果を時勢に対応させる必要に触れたことは、千仞を大いに驚かせた。「中人の説きて此に及ぶ者、至つてりょうりょう寥々たり」(11月23日)は、単なる科挙批判を越え、欧米の学術の導入、それと自国の学問との相対化、更にそこから時勢への対応を考える姿勢が、中国知識人には未だ究めて乏しいとする千仞の見解であった。

清朝の大官、李鴻章に、千仞は天津で二度面会した。李について当時の中国公使であった榎本武揚は、「一朝事有らば、(李)中堂以外に為すべき者無し」(10月20日)、「中土は是の人を除きて、未だ為す有るの人を見ず」(11月26日)と評しているように、まさに清朝きっての実力者と目されていた。その李との初めての会見では、時勢を知り、そして的確に対応することが話題となる。旧習へのこだわりを批判した千仞に対し、李は「足下は已に古の一字を悦ばず。然らば則ち時務(時勢)を知るや」とやや挑発的な調子で尋ねた。千仞は『孟子』を引用しつつ、自身は敢えて時務を知るとは言わないが、「時を知らざれば、則ち与に学を談ずるべからず、又た与に時事を論ずるべからず」と切り返して李を沈黙させてしまい、具体的な話には至らず終わる(以上10月10日)。二回目の会見では「語りて時事に及」ぶと、千仞は以前盛道台に語ったように、フランスとの対立を構える危機的状態を契機に「大いに策を建てて大勢めぐを運らせ、禍を転じて福と為し、危を変じて安と為さんことを」と、清仏の対立解決、及び内政改革への李の指導力、政治的手腕に対して期待を述べた。これに対する李の返答は、「我が邦の攘夷論の盛興なるも、亦た猶お貴国の廿年前のごとし。老夫の意に以為らく五年を経るに非ざれば、則ち為す有るべからず」と、幕末の日本との類似を認めつつも急速な現状の変革は望まれないと述べ、且つ「老夫はみだ明りに大用こうむを蒙り、任大きく責重し」と自身の力

の限界を示した（11月26日）。千仞は二度の面会を通じ、上述の清仏戦争打開策を、盛道台や沈子封といった李に近い役人を介して進言を試みたが、李の返答からも分かるように、結局は採用されず失望することになる。

最後に琉球問題に触れた議論を見ておく。翰林院の学士であった朱一新に、この中国旅行の記録である『観光紀遊』の草稿を見せた。朱はその内容を大方良しとした上で、千仞の清仏戦争打開策を行う人物が今の中国にはいないことだけが残念だと感想を述べた。その際、「琉球の一事、余は経甫に与す」と朱は付け加えた。経甫とは上述した張煥綸のことで、日本の琉球処分を「無名」と批判していた。千仞は朱に対し、日記中の経甫の言は中国の輿論で、また自身が述べた琉球問題への意見は日本の国論であり、共に個人的見解ではないと返答する。つまり国家と個人の立場は同じとは言えないと伝えたのであった。朱はこれを聞いて笑い、各人の立場に一定の理解を示した（11月9日）。それでは千仞自身、琉球問題について具体的にはどのように考えていたのであろうか。再び立ち寄った天津での二つの議論に、この点への言及が見られる。

まず新たに天津道台に就任した周馥から、琉球問題への意見を求められた。それについて千仞は、自分は在野の者でこの事についての詳細はわからない、しかし「中土は戎事（外国との対立）方に殷んたり。之を問わざるに付すの愈りたるに若かず」と答えた（11月26日）。また当時の中国では、フランス撃退に日本の協力を求める意見と同時に、日仏同盟形成への警戒感も高まっていた。李鴻章も第二代駐日清国公使の黎庶昌に、日本の動向を調査させていたという<sup>12)</sup>。こういった状況下で、先の道台の盛宣懷から千仞は、「或ひと曰く、貴国は法虜と協謀し、將に機に乗じて台湾を略取せん」との言を聞く。これに対して千仞は、「中人猜疑して、此の言を為すに至る。何ぞ事を見るに矇きや」と述べ、両国の関係は「輔車相依る者（持ちつ持たれつの関係）」で、「豈に此の危急に乗じて、狡焉として利を規るの心有らんや」と先ずは激しく抗議した。そして中国の同文の隣国でいくらか気力があり、そして協力関係を結べる国は日本のみである、「琉球は末界の微事なり。豈に小嫌に拘りて大好を失うべけんや」と述べた（11月27日）。

琉球問題を「末界の微事」とまで言えたのは、千仞が幸か不幸か現政府と何の関わりも無い民間人であり、且つこの問題で主導権を握っていた日本側にあったことは否めない。しかし科挙問題に対する提言をその最たる物とするように、一連の議論からはここに、あくまでも日中間の「善隣友好」を目指した千仞の姿こそを認めるべきかと思われる。フランスとの対立を抱えている今、同じアジアの一員である日本との間に敵対では

<sup>12)</sup> 前掲、西里、pp.444-446 参照。

なく協力関係を築き、挙国一致して内政問題の処理に尽力する重要性を訴えたと言えよう。

#### 4. 岡千仞と清末“燕京”の中国人士たちとの議論— その二 日本事情

次に日本事情を取り上げる。まずは服装に関する話題である。李鴻章と初めて会見した時、李は和服姿の千仞を見て「古貌古心」の持ち主と見なし、いささか諧謔的な態度で接してきた。これに対して千仞は、日本で官職に就く者は皆洋服を着用するが、自身は民間人である為その例から外れる、これは日本の習慣であって「古心」旧習に拘っているわけではないと弁明する。この後は先に見たように、時事を知ることについての激しいやり取りがなされた(10月10日)。また蓮池書院の汀紹基<sup>ていしょうき</sup>は千仞に、「日東は衣冠の旧国なり。何を以て欧服にするや」とやや批判的な調子で尋ねた。これにはまず天皇による親政のもと抵抗勢力を平定するに当たり、新政府軍の銃隊は皆「欧服」洋服を着て勝利したことを挙げる。その後改服の議論が起り、反対意見も噴出したが、最後は天皇自らが改服を決断したと述べ、「実に趙武の『胡服騎射』の遺意なり」と中国の故事を引いて返答すると、汀は黙りこんでしまった。「胡服騎射」とは、趙の武靈王が古い習慣を打ち破り、馬に乗りやすい異民族の服「胡服」を着、騎乗して矢を射る戦法を打ち立てたことを指す。この故事は明治4年(1871)、洋服の採用について「服制更革」の内勅が出された際に、守旧派の反対を抑える為に副島種臣も用いたという<sup>13)</sup>。更に千仞にとって、当時の中国人の服が「満服」で政治形態も「満制」であったことは、「衣冠文物の、亡びて已に久しきを知らず」で、「衣冠文物」への拘りそのものが空虚なものであった(以上11月16日)。

日本人の服装の変化に関する中国人の反応は、結局明治維新の評価と重なる。明治8年(1875)に行われた李鴻章と森有礼の会談でも、李は「西洋の『武器・鉄道・電信』の類を学ぶことは必要であるが、曆法服装など『先祖伝来のきまり』を変えること、特に政治制度の変革に強く反対し」<sup>14)</sup>、明治維新への批判と、自国の目指す変革が別の方向をとることを明示した。この時、森も千仞同様、「満服」「満制」で反論したという。服装のみならず欧米の文化、学術を学び、そして制度改革をも行った日本の姿勢が、多くの中国人士の批判を招いたことはよく知られる。ところがこれらは、一部の中国人を含め、当時の大多数の日本人にとって「変法自強」であり、他国の長所を学ぶその伝統は誇りであった。千仞はもちろんこの立場にあった。更に千仞は、同時代中国と日本の

<sup>13)</sup> 太田臨一郎『日本服飾史』中、(文化出版社 1988)、p.21 参照。

<sup>14)</sup> 王曉秋『アヘン戦争から辛亥革命—日本人の中国観と中国人の日本観』、(東方書店 1991)、p114 引用。李鴻章と森有礼の会談も同書の pp.111-114 を参照する。

相違としてこの点を強調した。例えば明治初期に日本を訪れた中国人の中で最も歓迎され、千仞とも親しかったジャーナリストの王韜は、著作『菰園文録』中で日本を「徒に欧米の皮毛を学ぶ」と記していた。千仞は当然この姿勢に反発を感じる。王韜が海外の大勢を論じる部分は高く評価しつつ、それでも上記の言があることに「翁（王韜）は彼（欧米）の大体を涉り、未だ彼の學術を究めず」とし、その欧米の學術、文化への理解の不足と閉鎖的姿勢を指摘した。そして千仞がその根拠としたものは、「我が邦の〔中国と違って対外的危機を〕免れて今日に至るは、他無く彼の皮毛を学ぶを以てす」と、異文化に対して柔軟な姿勢で臨んだ日本への評価であった（以上9月28日）。

ところで先にも述べたように、千仞は旅行中、和服姿で通した。旧習に拘らず自国に良品ものを採用した明治政府を賞賛しつつ、自身はその一員でないこと、また自国の伝統を重んじる姿勢を持ち合わせることを和服姿でもって示した。いささか屈折を感じざるを得ないものの、和服姿はまた国家と一線を画すことで、清国の現状批判、及びその打開策への自身の主張を、より強固なものにしようとした千仞の意志の表れだったと言える。

中国知識人の中には日本に関する基本的な知識を欠く人物もいて、しばしば千仞を意外に思わせた。例えば李慈銘は、清末の著名な学者、且つ詩人であり、また三十余年に亘って書き続けた『越縕堂日記』の著者としても知られた人物であった。「（李）愛伯は戸部に官す。晩年に登第し、その学殖徳望は、時流の推す所と為る」（10月26日）と、千仞もその評判を聞き及んでいた。しかし李から千仞は「我が邦の沿革」、つまり日本社会の変遷という大雑把で且つ基本的な質問を受けた。これに「我が邦の学者は、中土の沿革に涉らざる無し。而して中土の学士は、我が邦の沿革に瞭然たり」と、中国知識人の大国意識、及びそれによる学問スタンスに対する批判を千仞は抱かざるを得なかった（10月19日）。

また上述した汀紹基との議論の中で、汀に日本人もアヘンを喫煙するかと聞かれた。千仞は「洋煙は国禁なり。国人も亦た洋煙の何物たるかを知らず」と答えると、汀は不思議そうな表情をした。アヘンの弊害は中国特有の「内憂」と意識されるべきもので、欧米諸国と対等に交流する日本では考えられない、と言わぬばかりの口調である。「中土の儒流の事を解さざるは、往々にして斯の如し」はまた、自国が抱える問題の深刻さについて、少なからぬ知識人らの認識の低さを批判したものと言える（以上11月16日）。

李鴻章は自身の立場からも、二回の会見で千仞に竹添井井の近況（10月10日）、「要路に指名すべき者」、及び「伊藤〔博文〕参議の人と為り」（11月26日）など、日本の政治家に関する情報を求めてきた。千仞は現政権と関わりが無く、また日中の微妙な関

係にも配慮し、竹添、伊藤についてはごく簡単な評を述べ、「要路に指名すべき」人物としては岩倉具視、大久保利通の故人を挙げて、「今日要路に未だ両公の比を見ず」と答えるに止めた。清朝の実力者に対し、日本の国民であることを強く意識した千仞の姿が窺われる。

## 5. 岡千仞にとっての“燕京”への旅

さて“燕京”への旅は、清仏戦争の最中であり、また北京や天津といった清朝の政治都市の人士らと交流したこともあって、時事問題を中心に議論は盛り上がりを見せた。しかし中国人士、特に総理衙門や翰林院といった政府機関の役人でさえ、海外の大勢を見据え、自国のあるべき姿を再検討しようとする意識、気構えが総じて低いと千仞には感じられた。それは上述したように、自国の軍事力、及び国際的位置を把握せず、仏との争いに好戦的であったり、衣冠事物への拘りに代表されるような変革に対する柔軟性の無さ、日本に対する知識の欠如と強い不信感等に見られた。これらに対して千仞は、総理衙門の大臣が汽車の利便性を理解していない様子を眼にした時のように、「我が邦の維新以前、滔滔たること皆是なり」と、幕末期の日本を重ねた（10月16日）。この幕末に吹き荒れた攘夷の風潮を抑え、社会体制を大きく変化させながら明治維新を成し遂げた日本の例示には、近代国家の仲間入りを果たしたその軌跡を中国にも歩んでほしいという、微かな期待が込められていた。しかし同時にそれが容易でないことも、千仞は“燕京”の旅を通じて思い知った。なぜならそれは、「中土は今日猶我が邦の廿年前のごとし。唯だ我が邦は國小にして、乱も亦た小なり。中土は国大にして、乱も亦た大なり」（10月15日）と、両国の国情の違い、中国における事態の深刻さの為であった。千仞がその一大要因として科挙を挙げ、それを欧米文化への姿勢、現在直面している仏との対立とその対処法、且つそもそもそれらを取り決める立場にあるべき人員の養成、選抜などの諸問題の根源と見なし、様々な場で弊害を訴えつつ、欧学へ眼を向ける必要性を説いた様子はすでに見てきた通りである。しかしまた「余以為へらく科挙は俄かに改むべからずと。若し格致、算数の諸術を交えて士を取らば、則ち稍向う所を知る也」（11月8日）と、この時点では廃止ではなく、試験科目に欧米の学術を加えるという折衷案さえ考えたのは、千仞の眼が現実を直視していたからである。盛道台から自身の提言が李鴻章に賞賛を得たものの、結局拒否されたと聞いた時、「嗚呼中土をして果たして余の策を用いせしめば、則ち天下の事、未だ済い難しと為さざる也」（10月12日）と千仞は嘆いた。中国社会で最も影響力を持つ人物への期待が絶たれたこともあり、早急な変革を望めないことを、千仞は多くの場で痛感していたのである。

けれども“燕京”への旅は千仞の主張が中国社会に対し、いくらか影響力を及ぼす

可能性も残した。例えば蓮池書院の張裕釗には書の代表作として「重修南宮県学記」（1886年撰書）があるが、その内容は科挙とそれに結びつく書院制度を批判し、学問の府としてのあるべき書院の姿を論じたものであった。張の伝記に張の教えを受けた日本人として、宮島大八と共に千仞の名が特筆されていることから、「重修南宮県学記」の製作に千仞が書院生を相手に展開した科挙批判が影響した可能性は十分に考えられる<sup>15)</sup>。

また上述したように“燕京”への旅で千仞は、翰林院の学士の朱一新から『観光紀游』の内容に殆ど問題がないとの感想を得ていた（11月9日）。自身の詩文集を編集する際、中国人の意見を聞き、中国人による序跋文や評語を数多く掲載したり<sup>16)</sup>、旅の途中でも出会った学者らに文章の書き方を積極的に学ぶ姿勢が千仞には見られた。これらは千仞にとって、自らの著作を本場中国の基準で書くことが必定であったことを示す。そこで翰林院の学士による旅行記への好意的評価は、千仞に『観光紀游』出版を決意させる一要因となったに違いない。

さて魯迅には「皇漢医学」という一文がある。このなかに西洋医学の普及に対抗する中医たちに冷やかな視線を向けた魯迅が、中国社会の守旧精神を千仞と『観光紀游』で以て批判した箇所が見られる。「岡氏は、明治維新からさほど後の人ではないので、まだ改革への英気があった。だから彼の日記には、常に好意的な苦言があるのだ。革命的批評家に、世紀末の煩瑣晦渋で手のつけられぬ言葉を見るより、どの民族であれ開国期の文章を参考にしたほうがよい、と言う人があるが、この一事に照らしてみると、なるほどとうなずける」と<sup>17)</sup>。

『観光紀游』が中国社会に対する提言（「薬石の語」）<sup>18)</sup>となることを願った千仞だが、魯迅のこの発言からみるに、その意志は魯迅の理解を得ていたと言えよう。

## 主要参考文献

魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』（研文出版 2002）

宇野量介『鹿門岡千仞の生涯』（発行者・岡広 1975）

王曉秋『アヘン戦争から辛亥革命—日本人の中国観と中国人の日本観』（東方書店 1991）

王曉秋『中日文化交流史話』（日本エディタースクール出版 2000）

田中正俊「清仏戦争と日本人の中国観」『田中正俊歴史論集』（汲古書院 2004）

<sup>15)</sup> 前掲、杉村・寺尾、pp.113、及び前掲、魚住、pp.253-264を参照する。

<sup>16)</sup> 陳捷『明治前期日中学術交流の研究』（汲古書院 2003）、pp.159 - 160参照。

<sup>17)</sup> 『三閑集』、『魯迅全集』5、（学習研究社 1989）、p.337

<sup>18)</sup> 『観光紀游』【例言】

- 陳捷『明治前期日中学術交流の研究』（汲古書院 2003）
- 西里喜行『清末中琉日関係史の研究』（京都大学出版会 2005）
- 原敬『原敬日記』（第一巻）（乾元社 1950）
- 細見和弘「李鴻章と清仏戦争」『中国—社会と文化』第十一号（中国社会科学学会  
1996）
- 町田三郎『明治の漢学者たち』（研文出版 1998）
- 宮崎一定『科挙』（中公新書）（中央公論社 1963）
- 茂木俊夫『変容する近代東アジアの国際秩序』（山川出版社 1997）
- 『中国歴史大辞典』清史（下）（上海辞書出版社 1992）